

## 遠くて近い国の友人たち

### - 国際耕種の研修フォローアップ事業

真夏の暑いさかりの日本を抜けだし、この7月南半球で冬にあたる南部アフリカのマラウィ・ザンビアを訪問した。この旅のおもな目的は、帰国研修員に対する国際耕種独自のフォローアップである。当社では、2001年から10年にわたりJICA筑波での本邦研修事業（タジキスタン国別特設野菜栽培コース、南部アフリカ地域別特設野菜畑作技術コース、南アフリカ野菜栽培コース、野菜栽培技術コース、野菜栽培技術コース、小農支援のための野菜栽培技術コース、陸稲品種選定技術コースの通算7コース）を受託・実施してきている。今回は帰国研修員がとくに多く集積している南部アフリカ地域にターゲットをしばり、帰国後それぞれの職場での活動に関する追跡調査を実施した。過去においても、帰国研修員の多いタジキスタンに社員が2度ほどJICAの要請によるフォローアップで訪問している。また2005年にはジンバブエに出張した社員が少し足をのばしボツワナの帰国研修員を訪問している。筆者は直接研修事業にたずさわっていないものの、今回会社代表でフォローアップをおこなった。

当社では、日頃からよりよい研修事業の実施をめざし、内容向上について社内で議論を積み重ねてきた。今回のフォローアップはその一環として研修事業の質的改善へむすびつけたいという考えから実施したものである。帰国研修員たちに対しては事前アンケートをおこなったのち現地で個別にインタビュー調査をおこなった。インタビューの結果、帰国研修員の研修をとおして学んだことをそれぞれの持ち場で創意や努力で素直に実施しようとしている姿勢をひとまずは感じることができた。野菜・畑作分野では、種イモ切断による栄養繁殖やトマトの育苗管理導入から村周辺で調達可能な材料によるボカシ肥作りの実践・普及まで、JICA筑波の研修ではおなじみの日本の篤農家の技術群がそっくり

そのままアフリカの地で実践されているのを見ることができた。また稲作分野では研究員が普及の期待されるネリカを材料に品種選定試験手法を農家委託栽培のなかで実践している様子を熱く語ってくれた。

それにしても、今回帰国した研修員に接して再認識したのはJICA筑波における研修員と研修指導員の深い信頼関係である。研修指導員は、4-10ヶ月におよぶ研修期間中、研修員らと朝から晩まで接するなかで、ときには技術面のみならずプライベート面での相談や面倒をみながら業務をすすめている。このような場と時間のなかで濃密に培われる人間関係は、一朝一夕に築かれるものではない。ときには、けっしておおげさな表現ではなく、研修員と研修指導員は兄弟以上の友人同士であると感じた。こういう相互の信頼関係がベースにあるからこそ、直接研修にたずさわっていない筆者も古くからの仲間として迎えられ、今回のフォローアップ訪問がスムーズに運んだのだとおもう。

昨今、遠く離れた日本で実施される研修については懐疑的な見方もある。たしかに研修内容に着目すればわざわざ日本まででかけるよりは環境社会条件のちかい第三国研修が有効な場合もあるであろう。しかし、各研修員のキャリアのなかで体系的・集中的に野菜や陸稲の技術にどっぷり漬かる貴重な期間として、また技術研修のかたわら日本文化にふれ日本人のことが大好きになり日本の鼻根者を育てる機会として、本邦研修にはなにもものにもかえがたい効果・効力があるように感じる。そして、こうした遠くて近い国々の友人たち、すなわち帰国研修員らのネットワークを活用しながら将来共同でなにか小さなプロジェクトを始めていく、これが今回の訪問に託されたわれわれの夢である。



農家にインタビューする帰国研修員たち（マラウィ国ブランタイア）



ネリカ品種選定試験について熱く解説（マラウィ国サリマ）



トマト育苗実習の講師として活躍する帰国研修員（ザンビア国ルサカ）